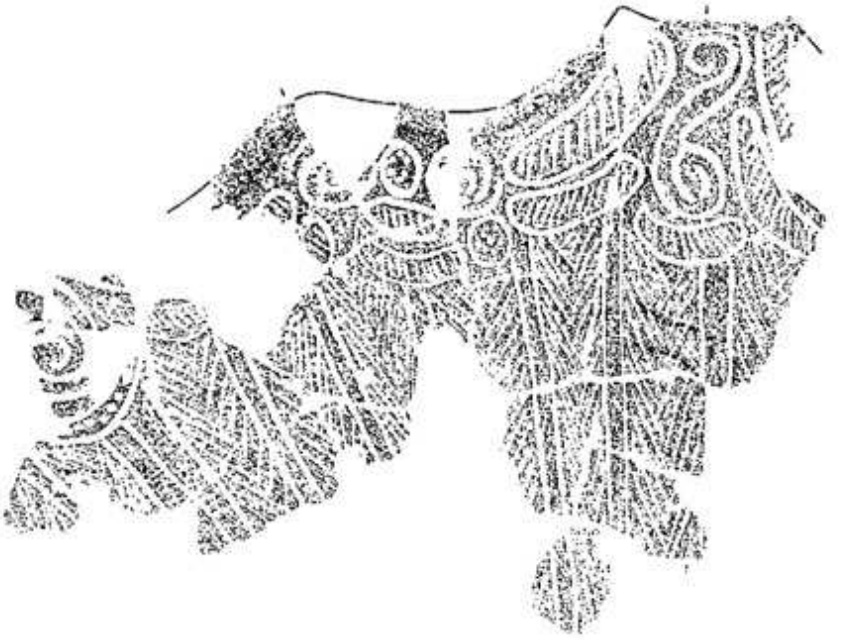
名古屋市中区栄一丁目

竪三蔵通遺跡

第8次・9次調査の概要



1989

名古屋市教育委員会

例　言

1．本書は、名古屋市中区栄一丁目に所在する、竪三蔵通遺跡の第８次・９次発掘調査の概要報告書である。

2．発掘調査は、昭和63年１月８日～３月７日（８次）、昭和63年４月４日～７月９日（９次）で行った。

3．調査は、名古屋市教育委員会が実施し、名古屋市見晴台考古資料館学芸員、平出紀男、木村有作、野澤則幸、伊藤正人、服部哲也が担当した。

4．調査に際しては、セントラルリース㈱、東栄㈱の両社に御協力いただいた。

　又、本書の作成にあたっては、下村信博氏、千田嘉博氏、水野裕之氏の御教示、御協力を得た。記して謝意を表します。

5．本遺跡出土の遺物、実測図等は、名古屋市見晴台考古資料館が保管している。

6．本書の編集・執筆は、伊藤と服部が行った。

目　次

Ⅰ　はじめに …… 1

Ⅱ　遺構と遺物 …… 3

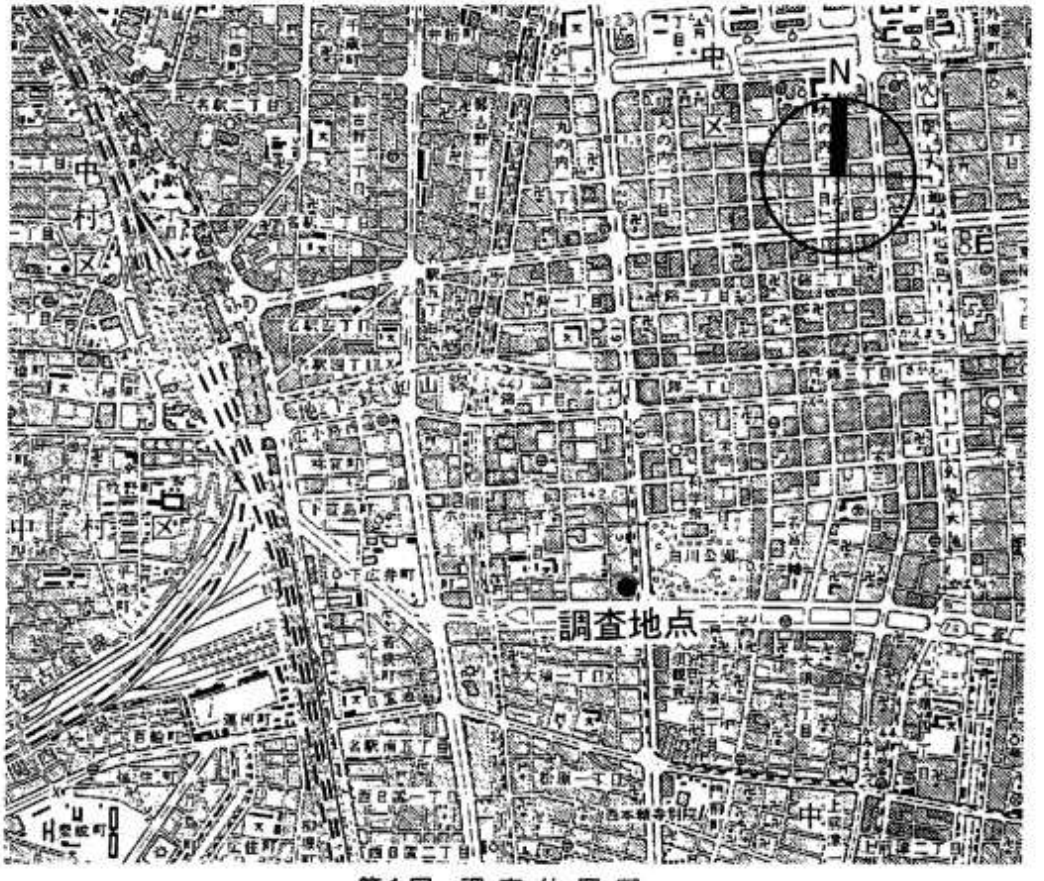
Ⅲ　まとめ …… 11

Ⅰ はじめに

位置と環境　竪三蔵通遺跡は、ＪＲ名古屋駅から南東へ約１kmの距離にある。地形的には、市内中央部に展開する洪積台地（名古屋台地と総称されている）のうちの那古野台地上に立地する。標高は５～10mである。

この那古野台地は、市内でも最も早く都市化の進んだ地域であり、その為か遺跡の発見も昭和45年頃と比較的新しい。しかし、その後７度に渡って行われた発掘調査では、旧石器時代～近・現代に至る多くの遺構と遺物を検出し、市内で最も古くより始まり、しかも現代まで脈々と続いた複合遺跡であることを明らかとしている。また遺跡の範囲も、東西約 450m、南北約 240m、面積約10万８千㎡が推定され、市内屈指の広さを有する遺跡でもある。

なお、本遺跡名「竪三蔵通」は、錦通から若宮大通に至る南北道路であるが、東西道路の「三蔵通」とともに、江戸時代尾張藩の御蔵があったことに由来する。



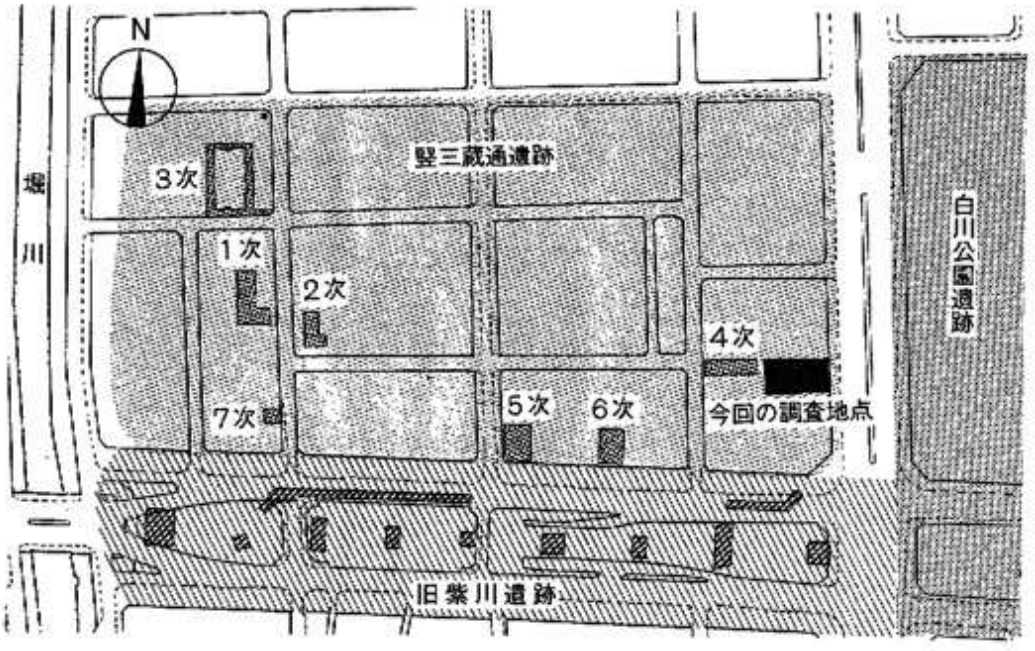
第1図　調査位置図

（国土地理院　1：25000　昭和55年）

調査の経過　昭和60年度当初、名古屋市教育委員会文化課は、当該地の南東部を所有するセントラルリース㈱より、当該地の埋蔵文化財の取り扱いについて問い合せを受けた。同社は、同じく土地所有者である東栄㈱と共同で、北及び西に隣接する㈱愛知看板製作所の土地を含めたビル事業の計画を進めていた。文化課では、昭和61年に試掘を行い、遺跡の残存を確認したため、㈱愛知看板製作所の移転を待って、発掘調査を実施することとした。面積が大きいため、調査は、昭和62年度（８次）、同63年度（９次）に分け実施した。

８次調査は、敷地北西部の約 400㎡を対象とし、期間は、昭和63年１月８日から３月７日であった。表土除去により、東方に向かって堆積土が厚く、掘削深も２ｍ以上に及ぶことが確認できた。このため、発掘区周囲の法面の確保等、安全管理に充分な配慮が必要となった。石垣が計４箇所で検出されたが、これらは実測図作成後除去して裏込め・掘肩を調査した。最終平面図は、２月25日クレーンによる写真測量で作成した。

９次調査は、８次の南及び東部の約 600㎡を対象として、昭和63年４月４日から７月９日まで行った。発掘区の東及び南側は、道路・建物に面するためＨ鋼を建て込み土留めを行った。掘削は、排土置き場の関係から前半（東部）・後半（西部）に分け実施した。発掘区内の様相は、おおむね８次調査から想定された通りであったが、埋め戻し条件等の変更により、６月中旬の終了予定を延長した。平面図の作成は、５月31日（前半区）、６月17日（後半区）に、いずれもクレーンによる写真測量を実施した。



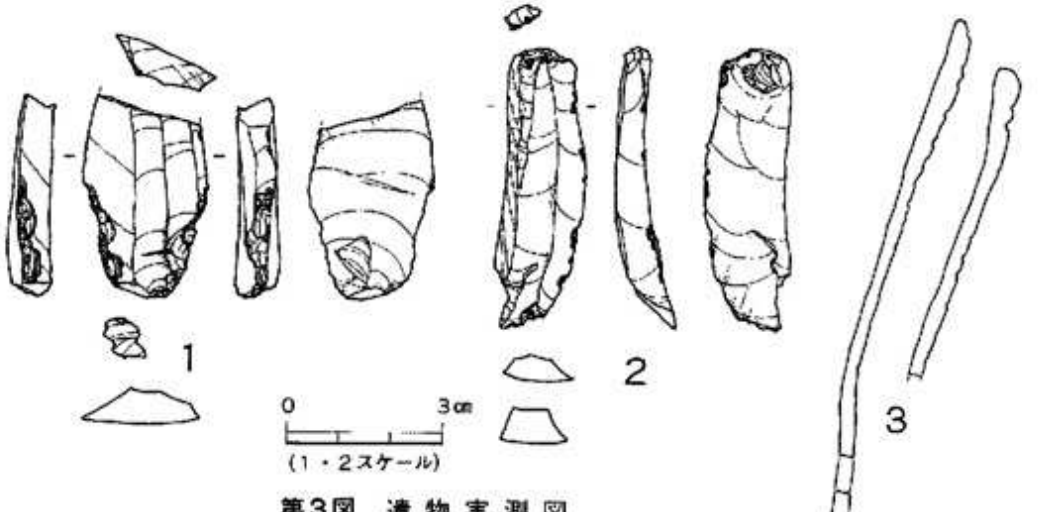
第２図　調査区位置図　（１：500）

Ⅱ　遺構と遺物

旧石器時代～中世

8・9次調査地点の基本的な地形は、西が高く東が低い緩斜面といえる。西寄り部分は台地上の平坦面にかかり、東端付近はさらに東方へ深みを増す浅谷状地形をなしている。この浅谷状地形は、近世初期に埋め立てられたものと考えられ、以後は屋敷地となったようである。調査区内の様相は、「紫川」河道付近を境にして異なっており、西側では砂がちな地山面に近世以降の土坑が多数掘り込まれ、東側では土坑等はあまり見られず、黒色土（中世以前の包含層）が厚く残存している。

遺物については整理が途上であるため、大雑把な概要のみを記す。最古の遺物としてナイフ形石器片がある。また、長さ 5.4cmの縦長剥片も、旧石器時代に属するものであろう。縄文土器は、中期末・後期初頭がまとまっており、中期初頭・後期前葉・晩期のものがわずかに見られる。弥生土器は、後期後半のものがほとんどで、古墳時代前期の土師器へと続き、須恵器は、5世紀末以降のものが見られる。奈良時代以降16世紀までの遺物は希薄で、質・量ともに見るべきものはないと言える。これらの遺物は、西部の近世遺構・包含層、東部の黒色土層中に混在していた。遺構としては、古墳時代後期頃の溝状・土坑状の掘り込み数基が、西部の平坦部で見られたのみである。



第3図　遺物実測図

No.	名　称	時　期	備　考
1	ナイフ形石器	旧石器	黄褐色チャート製、先端部を欠く。（9次）
2	縦長剥片	〃	暗灰色チャート製。（8次）
3	深　鉢（表紋拓影）	縄文中期	大波状2単位＋小波状2単位で、沈線文のみ。灰褐色を呈する。推定口径25～30cm。（9次）

江戸時代

主な遺構について以下に記す。

ＳＤ１０２　発掘区南東部の黒色土上面で検出した溝状の遺構である。幅約40cm、深さ約50cm、確認長約５ｍで、東西に伸びている。両端が近世以降に掘り崩されているため全形はわからず、黒色土に掘り込まれていたため地山に痕跡を残さなかった。黒色土ブロックで埋まっており、柵のようなものを立て並べた基礎であった可能性が考えられる。同様な遺構は、これ以外には確認できなかった。出土遺物は、黒色土中に含まれていた縄文時代～中世の土器・陶器片で、遺構の時期を決定できるものはなかった。東端が、谷状地形を埋め立てた土で切られていることから、江戸時代の初期か、あるいは中世末に属するものである可能性が強い。

▲写真１　ＳＤ１０２

ＳＫ１２　８次調査区の東隅にて検出した、長辺約90cm、短辺約55cmの長方形土坑である。深さは約25cmを測り、締まりに欠ける茶褐色土が一層堆積した。坑底にて施釉陶器５（織部釉鉢、同釉小皿、御深井釉碗、同釉小碗、同釉水さし）、染付磁器碗１、が出土した。これらの陶磁器類は、すべて完形で土坑東半に集っており、しかも特殊な器形が多いことから、何れかの埋納時に添えられたものと考えられよう。そしてその時期は、遺物の年代観から幕末頃と推定できる。

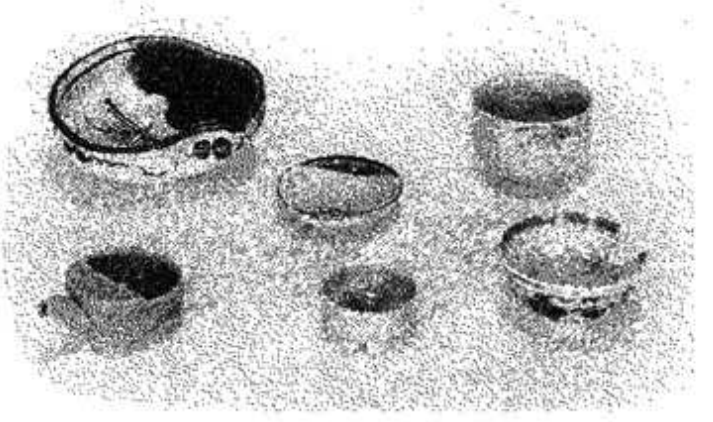
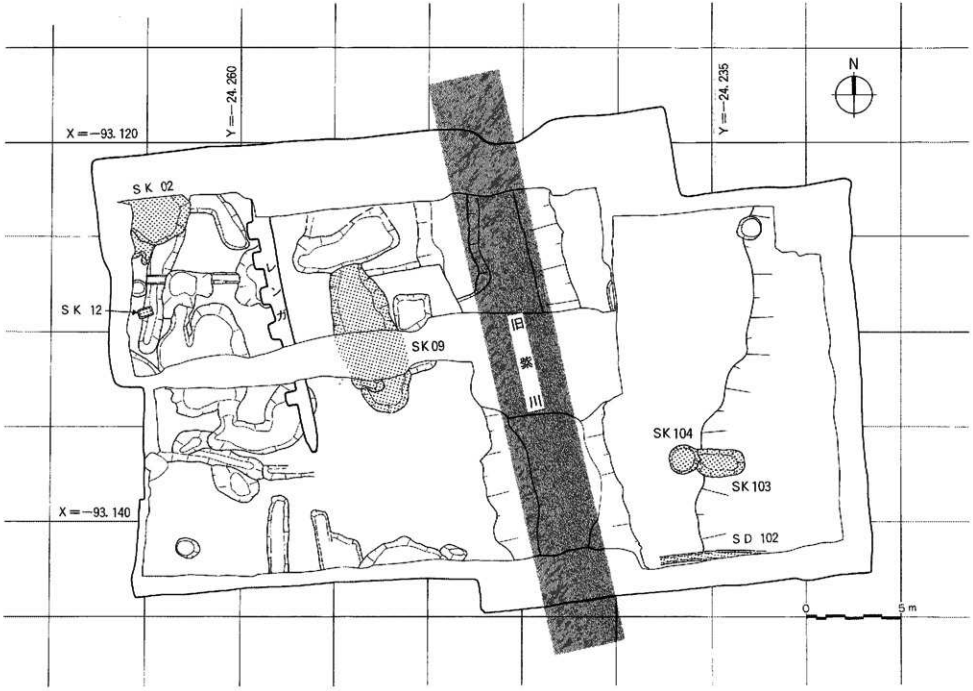
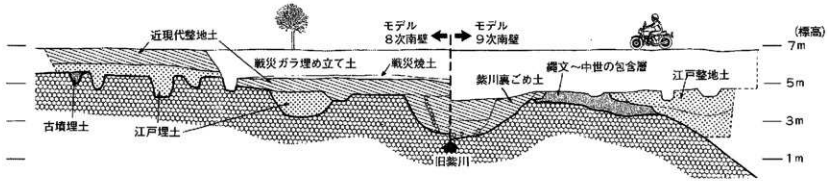


写真２　▶

ＳＫ12 出土遺物





第4図

主要遺構図
断面模式図
（1：200）

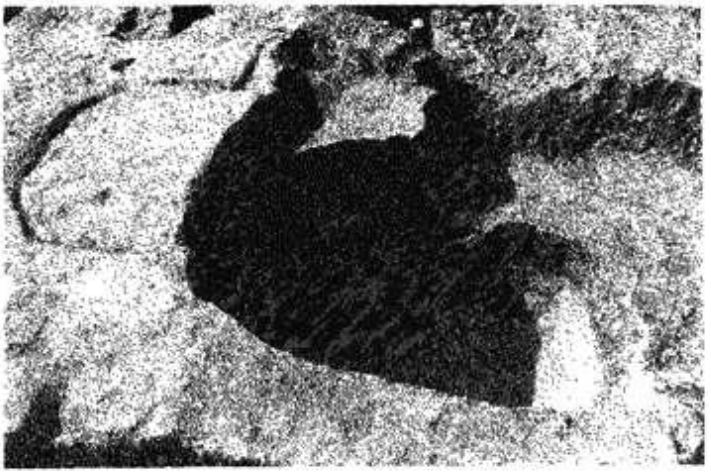
ＳＫ０２　８次調査区の北西隅にて検出した土坑である。一部は調査区外へも広がる為、正確な規模は不明であるが、３～５ｍの不整形な大形土坑で、深さは約 1.8m（最深部）を測る。埋土は上層に茶褐色土、下層に茶褐色砂質土の二層が基本的に堆積した。本土坑の特色は、坑壁が袋状にえぐれることと、坑底が長さ50cm～60cm、幅40cm～50cmの小さな長方形にいくつも区切られていることにある。坑底のいくつもの小さな掘り込み意味は不明であるが、壁面等の形状から貯蔵用土坑と推定されよう。出土遺物はほとんどが埋土中からの出土であり、坑底での良好な一括遺物はない。これら出土遺物の時期は18世紀代と考えられ、土坑の廃棄時期もその年代があてはめれよう。

写真３　▶
ＳＫ02

ＳＫ０９　８次・９次両発掘区にまたがって検出した土坑である。幅約３ｍ、長さ約８ｍの長楕円形を呈し、深さ約 1.5mである。壁は垂直に近く立ち上り、底面は平坦である。一部未掘部分があるが、埋土状況・出土遺物からは一つの遺構と考えられる。埋土は、底部付近では砂がちな礫（地山）の崩壊土等の自然堆積、中位以上は埋め戻し土と考えられる。出土遺物は大型遺構のわりには少ないが、時期的にはまとまっている。瀬戸・美濃産の陶器（碗・皿・鉢・播鉢等）、伊万里産の磁器（碗・皿）、土師器皿、いぶし瓦、煙管の雁首、寛永通宝等があり、ほとんどが17世紀半ば～同末に属する。遺構の時期も、17世紀後半に位置付けることができるであろう。

写真４　▶
ＳＫ09

ＳＫ１０３　発掘区東部の黒色土上面にて検出した土坑である。東西に長い楕円形を呈し、幅約２ｍ、長さ約３ｍ、深さ約 1.7m を測る。壁はほぼ垂直で、底面はゆるやかな凹部をなす。埋土は、下部が暗灰色粘性土、上半が埋め戻しと考えられる黄褐色・茶褐色砂質ブロックを主体とする土であった。遺物は下部にやや多く、瀬戸・美濃産陶器（碗・皿・鉢・擂鉢・茶入等）、伊万里産の磁器（碗・皿・小瓶）、土師器皿、土鍋、砥石等がある。これらの多くは、17世紀代に属しており、遺構の時期も17世紀後半に位置付けられよう。発掘時の所見では、ＳＫ１０３は、浅谷状地形の埋め立て土を掘り込んでいると考えられた。これが正しければ、浅谷状地形の埋め立ては、17世紀半ば、あるいはそれ以前と捉えることができる。



▲写真５
ＳＫ103・104
（未掘部分）

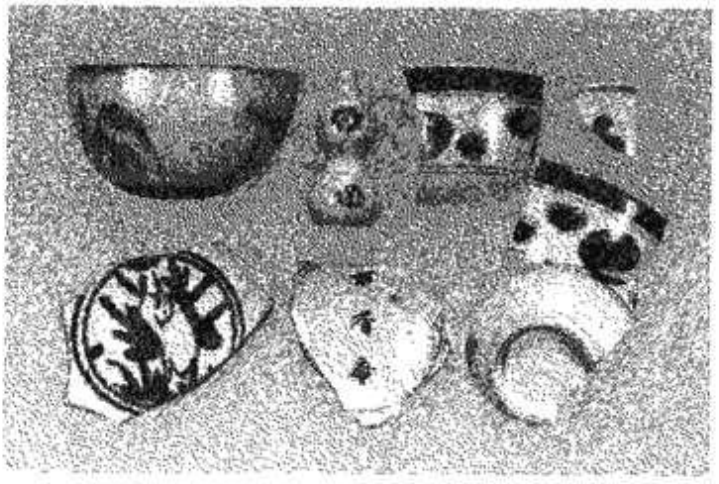
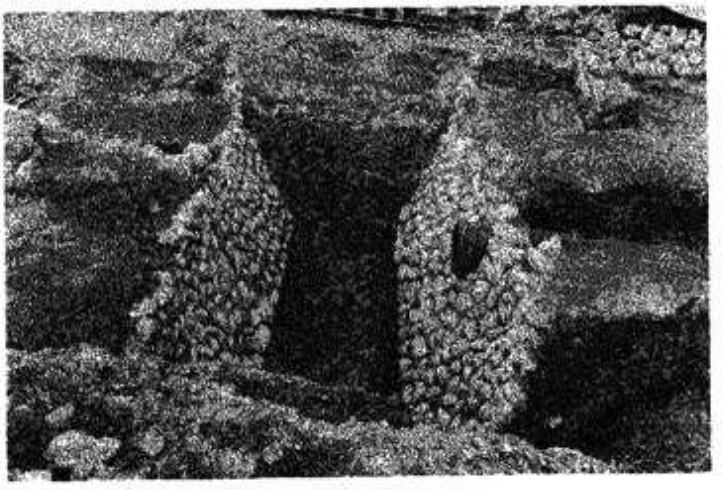


写真６　▶
ＳＫ103出土遺物

ＳＫ１０４　ＳＫ１０３に西接する土坑である。黒色土上面で確認した平面形は、直径約 1.6m のほぼ円形であった。壁は、上部でややすぼまったのち垂直になり、２ｍ以上掘り下げてなお底面に至らなかった。形状等から井戸と考えられ、埋土は、埋め戻し土と考えられる暗灰褐色砂質土である。遺物は少なく、いぶし瓦片の他は陶片がわずかに見られるのみである。発掘時の所見では、ＳＫ１０３に切られていたため、17世紀のものと考えられるが、遺物の検討を経ておらず、時期を確定し得ない。

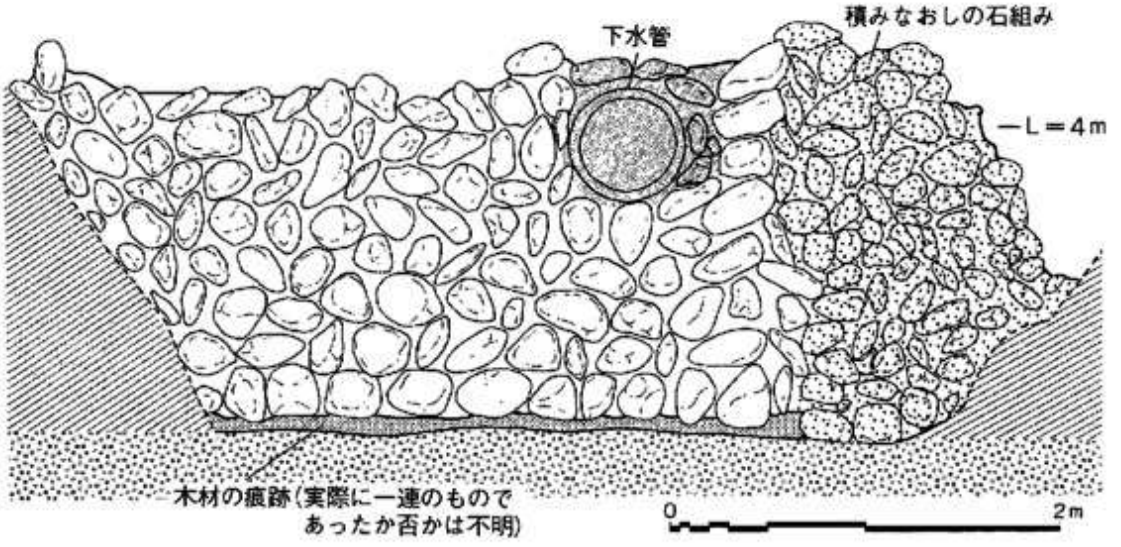
明治時代

旧紫川　調査区中央やや東よりの地点にて「紫川」と推定される遺構を検出した。護岸用の石組みは、8次調査区と9次調査区の南端で遺存していたが、その中間では再利用の為か取りはずされていた。遺存度の良好な8次調査地点での川幅は約 3.5m（川底での幅は約 1.5m）、深さ約 2.5mを測った。護岸用の石組みは木材を最下に敷き、すき間を漆喰で丁寧に固めつつ、積み上げられているが、数ヶ所にて積み直しが認められた。川内の埋土は、上層の埋め立て土と下層の堆積土に二分されるが、いづれも第二次大戦の戦災ガラを含まないことから、戦前には埋め立てられた状況であったと考えられる。又、護岸石組



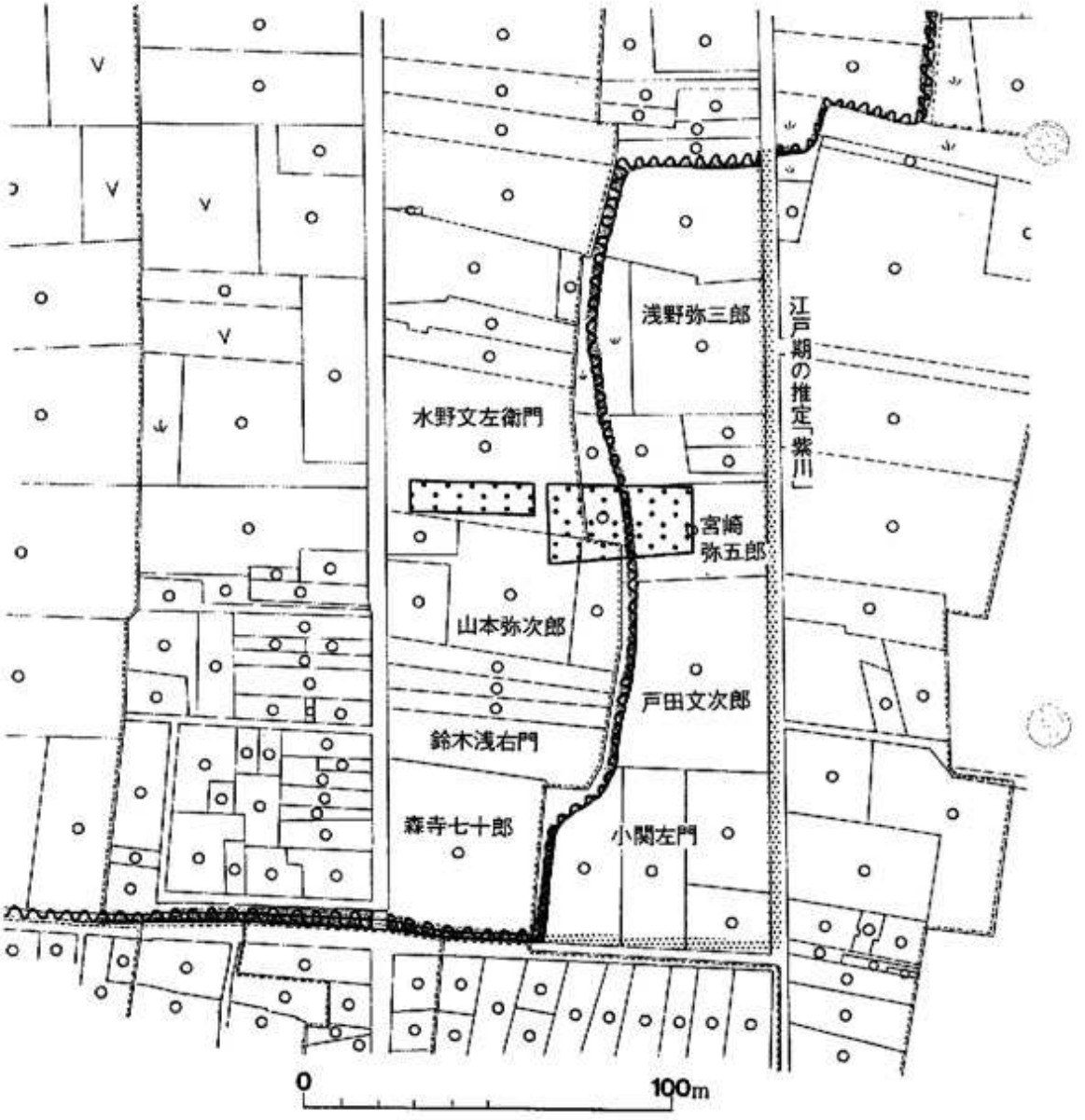
◀ **写真7**

8次調査時の紫川



第5図　旧紫川石組み側面図（1：40）

みの裏込め土からは、幕末～明治の遺物が出土し、本川の構築も幕末をさかのぼらないと推定された。所謂「紫川」は、名古屋城下町形成時に構築された人工の川で、17世紀代の絵図にはその存在が示されている。今回の調査結果は、幕末～明治頃に流路をも変える大改修（下図参照、もともと現在の伏見通りぞいを南下していたと推定される。とすれば、約40m～60m西側へ改修されたこととなる）が行なわれたことを明らかとしたが、その理由は今後の課題である。



第6図　明治17年頃の地籍図への調査区投影（1：2000）
（居住者名は、宝暦年間の『坪間路検帳』をもとに復元）

Ⅲ まとめ

白川公園遺跡・旧紫川遺跡を含め、近辺における発掘調査地点は20箇所を越えることとなった。旧石器時代以降各時期の遺構・遺物が発見され、遺跡群としての重要性は次第に高まっている。今回の調査地点においても、数多くの知見を得ることができた。周辺調査との関連の中で、今回の調査の主な成果を簡単にまとめておく。

旧石器時代　わずかではあるが、遺物の出土が見られた。5次調査においてややまとまった石器群（ナイフ・尖頭器等）が出土しており、関連に興味が持たれる。

縄文時代　従来、旧紫川遺跡を主とする旧谷地形部分を中心に多くの遺物が出土している。竪三蔵通遺跡の主体を占める台地上に集落が営まれていたと考えられるが、後世の土地利用により破壊されているらしく、現在のところ遺構の検出例はない。今回の調査でも同様であるが、土器を中心とする遺物の分析は、台地上での活動に迫る手掛りとなろう。

弥生時代　5次・旧紫川遺跡1次・白川公園遺跡2次の各調査で、後期後半のまとまった遺物が出土している。後期前半はそれほど多くなく、中期以前はほとんど遺物が見られず、今回の調査でもこれは同様であった。後期後半（久山式）において、大規模な集落が形成された可能性が考えられる。

古墳時代　上記の集落は急速に収縮したようである。今回の調査を含め、古墳時代前期の遺物は激減する。後期には集落も発達したようだが、西接する4次調査地点の古墳らしい溝や今回の遺構のあり方は、この付近の非居住的様相を示すものと言えようか。

奈良時代～中世　遺跡群全体で見れば、遺物の出土は間断なく見られるが、量的には多いものではない。1次・6次などでは遺構も検出されているが、4次と共に今回調査地点付近では、あまり遺構・遺物を残すような土地利用がなされていなかったと言える。

江戸時代　5次調査と同様な、谷地形の埋め立て整地の状況が観察された。時期の特定はなし得なかったが、17世紀半ば以前と考えられ、名古屋城下町の形成期における大規模な土木工事の一端を知ることができる。この埋め立ては、「紫川」整備とも密接に関連するものと考えられる。当初の「紫川」は、現在の伏見通を南流しており、今回調査した浅谷状地形は、「紫川」の整備前の姿を示すものと言えよう。17世紀後半以降は、土坑や井戸などが多数見られるが、調査面積が狭いことや各時期の遺構が重複しているため、屋敷地内の具体像を示すことはできない。

明治時代　明治時代前期に西寄りに掘り直された「紫川」の検出により、地籍図等を遡って調査位置を町割りの中に特定することができた。今後、城下町研究を進める上で、非常に重要な意義があると言えよう。

名古屋市中区栄一丁目

堅三蔵通遺跡

第8次・第9次調査の概要

1989年3月31日

発行　名古屋市教育委員会

印刷　合資会社　東海プリント社